

IX. 視察報告

IX-1. 立命館大学

参加者：経済学部 神立学部長・浅井教授

キャリアセンター 服部課長・羽賀主任・平澤

IX-1- (1) 立命館アジア太平洋大学 (大分県別府市)

Q1：キャリアセンターの職員人数や業務範囲、教員や学部との役割分担は？

- ・キャリア・オフィスの人数は20名（内訳：専任6名、契約6名、派遣8名）
※エクステンションセンターを含む（講師選定は大学生協が窓口）
- ・教員と職員の連携課題について、答えは持っていない。
- ・キャリア科目については教務が担当している。
- ・キャリア関連の情報については、全学委員会にて半期に1度、周知している。

Q2：キャリアサポートの全体像は？

・トップ講演会（国際的な企業のトップや各界のリーダーを講師に招き、世界の政治・経済の現状や国際社会が抱える問題と将来への展望、また社会が求める人材像などについて講演）とキャリアディベロップメント講座（ビジネスの第一線で活躍する方を講師に迎え、「業界分析」「職業意識とキャリア開発」をテーマにレクチャー）を開催している。

・就業力は授業+ α （学生生活）＝学生が取り組んでいることのすべて、特に+ α の能力が身に付く場として、APハウスという日本人と留学生が共同生活を行っている場や2006年度に現代GPに採択された「グローバル人材養成のためのキャリア教育」から始めた大分県別府市内でのフィールドワークなどが挙げられる。

・正課の授業ではキャリアデザインⅠ、Ⅱ、Ⅲを実施
・第三者（機関）によるキャリア支援の評価については学内の様々な方にレビューして貰っている。

・就業力GPのテーマは「APU型就業力測定指標の開発と就業力育成」

・取り組み内容については、経験学習、正課外活動を通じて得られる「課題設定力」「問題解決力」「協働力」「実践力」などの思考・行動特性と正課教育から得られる意識、知識、理論との有機的な統合の抜本的強化を図ることが必要であり、これを実現するためのマトリクス指標と検証手法の開発を行うとともに、正課・正課外を統合化した系統性のあるエンプロイヤビリティ・アセスメントプログラムを実施する。



・取り組みに際して、エンプロイヤビリティの指標開発には苦勞している。現在、仮説を立て、アンケートの作成を行い、企業にヒアリングを行っている。それを学生1人1人に分かりやすい言葉で落とし込みたい。

Q3：各学部での教学目标や育成を目指す人材像

・APUの人材育成目的を定め、各学部で定めている。

Q4：学生の能力を伸ばす試みは？

- ・学生に期間を決めて大学構内をプロデュースしてもらう取り組みを行っている。
(今週は韓国、来週はインドなど)
- ・学生にイニシアティブを持たせることが大切

IX-1-(2) 立命館大学 琵琶湖・草津キャンパス視察

Q1：キャリアセンターの職員人数や業務範囲、教員や学部との役割分担は？

- ・職員数は60名（キャリアオフィス衣笠 30名、キャリアオフィスBKC 30名）
- ・立命館大学ではキャリア教育センターとキャリアセンターがある。
「キャリア教育センター」はEducationalな立場でキャリア教育を行っていく立場である。
「キャリアセンター」は実践的な就職支援（就職相談やES添削、面接など）を実施している。
- ・正課のキャリア科目は「Career形成論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」を提供している。
- ・授業ではFor Othersというメッセージを発信している。
- ・グループやチームの中で自分の力をどのように発揮するかが大切である。
- ・キャリア科目については、各キャンパスにコーディネーターが1人おり、各学部にキャリア形成を担当する者を配置している。
- ・立命館大学ではコーオペ教育プログラムを提供している。
コーオペ教育とは、ほぼ一世紀の歴史を持ち、欧米では一般的に取り組まれている本格的な長期インターンシップで産学が協力し合う(Cooperative)ことからコーオペ教育と呼ばれている。参加する学生の専攻学問と就業体験が関連付けられている点が特徴である。
- ・立命館大学のコーオペ教育プログラムは「コーオペ演習」とそれをサポートするキャリア教育科目「コーオペ教育概論」で構成されている。その中でどのようなチームが成果を上げるのか。どのようなリーダーがいるのかなど、実践的な取り組みの中で、模索している。また、模索のためのワーク（評価指標）なども準備されて

いる。

- ・本取組みの成果について、世界コーオプ教育学会で学生が発表したところ、学生賞を受賞している。
- ・外国人留学生対象の「キャリア形成支援プログラム」も準備している。

Q2：意欲の低い学生への取り組みは？

- ・インターンシップへの押し出しや低学年次から呼びかけを行っている。
- ・2年次に何が出来るかが重要だと認識している。



IX-2. カナダ・バンクーバー視察

＝訪問地・出張期間＝

カナダ・バンクーバー 2011年3月7日（月）出発－3月13日（日）帰国

＝参加者＝

長谷部教授・ホンマ教授・下出国際部事務部長・村上事務長

＝生活環境等＝

バンクーバーオリンピックに向けて、交通網が整備されたために、交通の便もよく、治安もととてもよいと感じた。このために、日本人も含めて多くのアジアの人々が住んでいるために、町中を歩いていると、度々日本語を耳にすることもあった。学生を派遣する場合、物価が少し高いことに関しては、伝えておく必要があると感じた。

＝緊急時の対応＝

バンクーバー市内にある日本領事館を訪問したところ、学生への安全講習などに関しては、協力的であった。また、海外傷害保険に加入していれば、キャッシュレスで診療を受けることができ、更に日本語通訳が常駐している病院を訪問した。更に、留学中に海外傷害保険を使用する医療費や賠償費用などの対応を無料でサポートするセンターも訪問し、話を聞くことができた。

＝関係教育機関の訪問＝

サイモンフレーザー大学（SFU）メインキャンパスでは、教育学部の国際・プログラムのディレクター（1998年に創価大学を訪問したことがある方）と短期国際・プログラムのコーディネーターと懇談をすることができ、交

渉によっては、創価大学生のためのプログラムを作ることができるのではないかと感じた。また、カナディアン・ツーリズム・カレッジでは、校長と話をすることができ、こちら側の要望を伝えたところ、こちらの提案に沿ったプログラムを提案していただき、インターンシップ・プログラム前半の研修の一部に採用することも考えられるのではないかと感じた。



＝インターンシップ先＝

インターンシップ先の候補先を3件訪問した（ダウンタウンにあるホテル、ダウンタウンにあるレストラン・やや郊外にあるホテル）。どの訪問先も、受け入れる趣旨を理解しているので、よい受け入れ先になると感じた。特にやや郊外にあるホテルの総支配人は、カナディアン・ツーリズム・カレッジで講師もしており、インターンシップのコーディネーターとしての役割も果たしてもらえる可能性があるとのことだった。

＝UBCとSFU（ダウンタウン・キャンパス）の訪問＝

UBCでは、英語教育部門のディレクターと懇談をした。英語プログラムは人気があり、ほとんどのプログラムが満席になっていた。この英語教育部門にインターンシップ・プログラムもあるとのことだったが、詳細は現在調査中である。SFU（ダウンタウン・キャンパス）では、プログラム・コーディネーターとナショナル・コーディネーターと話をすることができた。ここでは、ある程度の人数がそろえば、受け入れることができるとのことだったが、基本的には、受け入れた学生をまとめて教育するかたちになっているとのことだった。ホームステイ先の斡旋もしており、ほとんどが対岸のノース・バンクーバーがホームステイ先になるとのことだった。

＝JTBバンクーバー支店＝

ダウンタウンから車で20分から25分ほど南下した空港近くであり、主に1階が事務所、2階が研修施設になっていた。JTBバンクーバー支店では、近々教育事業を展

開する予定があるとのことだった。現在、JTBバンクーバー支店では、中央大学・流通経済大学・高知女子大学など学生を受け入れていた。

＝今後の課題＝

- ・プログラム前半の英語を中心とした研修内容の充実
- ・インターンシップ先の十分な確保
- ・インターンシップ先での研修内容の充実
- ・必要なビザの確定

視察先で、こちらが伝えた課題を踏まえた研修内容を、4月中旬までにJTB法人東京が取りまとめてくることになっている。この内容を検討し、実施をするにあたって十分な準備が整っているかを判断して参りたいと思っている。

IX-3. カナダ・ビクトリア視察

＝Co-operative (COOP) プログラムについて＝

Co-operative (COOP) プログラムは、大学と企業が共同して作りあげるプログラムであり、学生の就業力の育成ならびに学習意欲の向上を目指したプログラムとなっている。具体的には、インターンシッププログラムをより発展させたものであり、教室での学習と社会での労働を組み合わせたものを数回にわたり長期間経験させるものである。短期のインターンシップとは違い、1回の就労期間は約4カ月(1セメスター)であり、トータルの就労期間としては最長4回、16カ月まで可能であり、在学中に、何回も社会人としての経験を積むことができる。もちろん就労に対しては給与も支払われ、学費の足しになる。また就労経験から教室での学習の大切さも学ぶことができる。

＝経済学部高木教授と小林教授がカナダを視察＝

Co-operative プログラムは、カナダ全般でいまや幅広く行われている。そこで今回(2011年3月)、経済学部高木教授と小林教授の2人が、ブリティッシュコロンビア大学(UBC)経済学部とビクトリア大学(UVic)を訪問し、両大学におけるCo-operative プログラムを視察した。

＝ブリティッシュコロンビア大学(UBC)経済学部2011年3月9日(水)＝

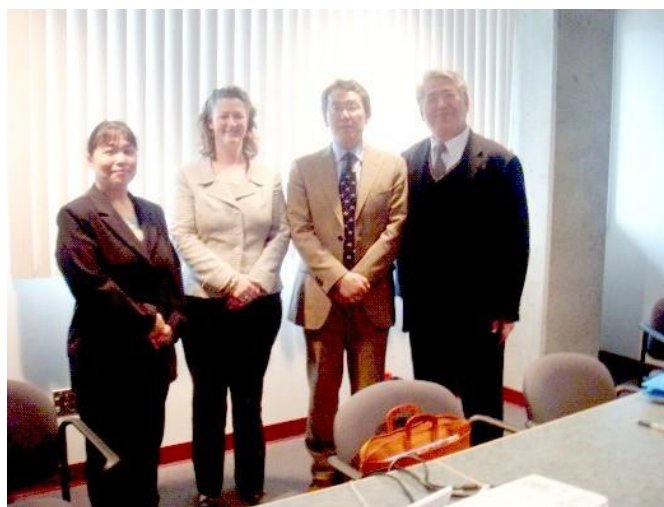
ブリティッシュコロンビア大学(UBC)では、経済学部のCo-operative プログラム担当をしているDr. Viktoria Hnatkovskaを訪問した。UBCでは、このプログラムを大学全体と学部学科ごとに担当を分けて取り組んでいる。大学全体として一般的なトレーニングを行い、学部学科ではアカデミックなトレーニングを供与している。具体的には、経済学部では、統計的なりサーチの方法や経済学の理論と実践に関するセミナー等をお

こなっている。仕事の現場は、政府機関が中心となっているが、民間企業でも進められている。

＝ビクトリア大学(UVic)訪問 2011年3月10日(木)＝

ビクトリア大学においては、まず、Co-operative Education and Career Services を訪問し、Executive Director の Norah McRae 女史より同プログラム全体についてプレゼンテーションを受けた。次に、このプログラムを必修としている経営学部における同プログラムへの取り組みについて、Ms. Marguerite Casey-Wolnicki と Ms. Yumi Morishima からプレゼンテーションを受け、引き続き同センター内を見学した。最後に、Office of International Affairs を訪れ、Assistant Director の David Wang 氏と大学間の国際交流の状況について意見交換を行った。

ビクトリア大学では、カナダで2番目の規模を誇る COOP プログラムを実施していて、1975年から現在までこのプログラムを通じて60000人の学生をサポートしてきたというだけあり、同大学のCOOPプログラムは大変充実した内容であった。具体的には、このプログラムに入る学生は、卒業までに3回以上のWork term(就労学期)を経験することが課せられており、大学におけるStudy term(学習学期)とWork termを交互に行うようになっている。また就労内容は2年次、3年次、4年次と学年が上がるにつれて、高度なレベルへと展開していくようになっている。Study termにおいては、大学の通常の授業に加えて、Work termの就労に必要なとされる技能のトレーニングが学生のレベルに応じてCOOPセンターより提供されている。就労による給与は、平均して月2000ドル支払われ、採用に際しては、実際の就職活動と同じように、企業の担当者から面接を受け、企業により採用が決定される。こうしたプログラムにおける実践を通して、コミュニケーション能力、課題発見、分析能力、チームワーク力等々、汎用的な能力(ジェネリックスキル)が確実に鍛えられ、プログラムは大成功している。その証拠としてプログラム履修者は、ほぼ100%就職を勝ち得ているとのことであった。



IX-4. バンクーバー・インターンシップ視察報告書

実施期間：2012年3月7日（水）から11日（日）

参加者：神立 孝一教授（経済学部学部長）、小林孝次教授、齋藤之美教授

訪問場所：JTB インターナショナル・カナダ バンクーバー支店、サイモン・フレ
ザー大学、カナディアン・ツーリズム・カレッジ、インターンシップ研修先14ヶ所

報告内容：

2012年2・3月に開始されたバンクーバー・インターンシップがどのように行われているかを確認し、どのような問題点があるかを検討するために実質2日半の日程で視察を行った。

まず、研修を支えている諸機関の担当者との会合、様々な意見交換を行った。バンクーバー・インターンシップを取り纏めているJTB、学生が語学研修を行ったサイモン・フレザー大学、語学研修の後、3日間のビジネス英語やビジネス・マナーの研修を行ったカナディアン・ツーリズム・カレッジである。本学部においてはすでに水準の高い語学プログラムを有すること、個々の学生の英語レベル、本プログラムに対する期待について、じっくり意見を交換することができた。特に、語学研修機関であったサイモン・フレザー大学からは、学生の語学水準について高い評価をいただいた。今後時間をかけて、現在のプログラムをさらに改善していくことで意見が一致した。

次に、学生のインターンシップ研修先を訪れ、学生の実際に働く様子を見学後、責任者とお会いし話し合う機会をもった。インターンシップ先はバラエティーに富んでおり、学生の希望に極力沿うようになっていた。学生の満足度は非常に高いことも確認できた。学生が生き生きと働く姿を見て、働くことに対する高い意識と自覚をもって取り組んでいることがわかった。受け入れ先のどの担当者も、各学生に対してとても好意的な意見をお持ちであった。

短い視察ではあったが、私たちの求めるプログラム像について真剣に意見交換できたことは、予想以上に価値があったと思う。また、話し合いの中で、今後も諸機関と連絡を密に取り合いながら、プログラムの質をさらに高めるための努力をお互いに続けていくことも確認できた。



SFUにて意見交換



インターンシップ研修中の様子

IX-3. オーストラリア・メルボルン インターンシップ候補地視察報告書

実施期間：2012年3月6日（火）から11日（日）

参加者：長谷部秀孝教授、杉本一郎准教授、村上克美事務長、国際部：下出事務部長

訪問場所：ラトローブ大学・ビクトリア大学・メルボルン大学・JTBメルボルン支店・
インターンシップ候補機関（ホテル・高校・ショップ・商社等）

報告内容：

現在、イギリス・マンチェスターとカナダ・バンクーバーにおいて、海外インターンシップ・プログラムを実施しているが、更なる海外インターンシップ候補地として、オーストラリア・メルボルンを視察した。すでに実施している海外インターンシップ・プログラムと同様に、春休みの2ヶ月間を利用して、前半の1ヶ月間をビジネス英語研修、後半の1ヶ月をインターンシップとするために、ビジネス英語研修を行える大学及びインターンシップ受入れ先を訪問した。

ビジネス英語研修を行う大学は、メルボルン大学を中心に検討をしている。インターンシップの受入れが可能な機関は、15名を派遣しても、十分に確保できることが確認できた。

海外インターンシップにおいては、実施前の研修と実施後の研修が、重要である。今後、現地でのプログラムの内容とともに、実施前後のプログラム内容を検討し、学生が海外において就業経験ができる機会を提供していく予定である。

